

可能動詞について

—可能動詞を含む複文に関する一考察—

赤羽優子・浜津大輔（デュッセルドルフ大学）
akahaneyuko2@gmail.com, hamatsu@hhu.de

【要約】

本研究は、日本語教育における初級段階の可能動詞の扱いに着目し、学習者が産出する不自然な文例を手がかりに、可能動詞を用いた複文の学習上の問題点と改善の方向性を検討したものである。複文において、可能動詞は非意志的表現の一つとして扱われる傾向があるが、学習者にとって捉えにくい概念でもある。そこで学習者の実際使用の一助となるよう、渋谷（1993）が分類した実現系可能という概念を用いた説明を提案する。

1. はじめに

「～できる」ことを意味する可能表現は、モダリティの一種であり、日本語教育において初級中盤以降導入される基本文法項目である。また、他の文法と結びつくことで構文を成立させるため、中級レベルにかけて繰り返し現れる重要項目でもある。例えば、「会えて、よかったです」という文は、可能動詞のて形に感情表現を続けることで、て形部分が原因を表し、「出席できるかどうか、返事をください」という文は、可能動詞の普通形に「かどうか」を接続して行為の可不可を表現する。

本研究は、初級レベルで扱われる可能表現の中でも可能動詞に注目し、筆者らの勤務校の学習者が産出する非文を元に、可能動詞を用いた構文を学習する際の問題と課題を探るものである。

2. 背景と課題

2.1 可能表現の学習

筆者らが所属するデュッセルドルフ大学現代日本研究科の学士課程専攻日本語講座の授業は、4学期（2年）で構成されている。多くの大学と同じく1コマ90分で設定され、学生は毎日1コマ、週5コマ日本語の授業を受講する。1学期目は90人から100人ほどの学生が登録し、1クラス22人から25人ほどの4クラスで編成されている。学生は授業前に教科書とオープンソースのLMS（学習管理システム）を利用して、予習をした上で授業に臨み、授業後は復習と宿題に取り組むことが必須とされている。教科書は、『みんなの日本語 初級Ⅰ』（スリーエーネットワーク 2013）から入り、3学期目の終盤で『みんなの日本語 初級Ⅱ』（スリーエーネットワーク 2013）を終え、『まるごと 中級1』（国際交流基金 2016）に進む。

この講座で可能表現がまず導入されるのは、2学期の一番初め、『みんなの日本語 初級Ⅰ』の第18課「辞書形＋ことができます」である。次に続くのが可能動詞であるが、これは2学期の半ば、第27課で登場する。両者の間の第19課から第26課では、第20課で普通体の例文や練習として「話すことができる」「読むことができる」「修理することができる」などが現れるが、文体の提示と形態の変化

を扱うのみであり、可能の意味や機能に焦点は当てられていない。一方で、第 27 課以降、他の構文を学習していくと可能動詞が用いられる文型が現れる。例えば、第 35 課の条件形の複文を作る「ば」では、後件において「許可をもらえば、寮でパーティができます。」のような肯定文に加え、「書かなければ、漢字は覚えられません。」といった否定形も提示される。また、第 36 課では「日本語が話せるように、毎日練習しています。」のように、目標や希望を表す複文の前件において、「ように」が後続する文法項目の一つとして紹介される。さらに、「やっと自転車に乗れるようになりました。」といった能力の変化に加え、「夫の田舎まで 4 時間で帰れるようになりました。」といった環境の変化でも、「ように」に前接する非意志動詞の一つとして可能動詞が扱われる。そして第 39 課では、て形を使って原因と結果を述べる文で、「て」を挟んだ前件でも後件でも用いられる非意志的な表現の一つとして、形容詞などの感情表現とともに可能動詞が提示される。このように『みんなの日本語 初級Ⅱ』の 30 課代では、「非意志」というキーワードとともに、可能動詞がたびたび構文を成立させる要素として紹介される。

2.2 作例への違和感と課題

上述のような課の学習時に学生が作った例文を見ていくと、違和感が生じる作例が出てくることに気づく。例えば次のような文である。

- 1) ? 友達がチケットを買ってくれたおかげで、きのうコンサートに行きました。
- 2) ? 行けばよかったのに・・・。

これらは、可能動詞が使われていないことで違和感が生じた文である。1)の文は「おかげで」の前件で原因を、後件で良い結果を表す。後件は過去形で示す必要があるが、同時に可能形でないと違和感が感じられる。一方、2)は「～ば～のに、…」で「…」の後件部分が省略された複文であるが、前件が反実仮想条件文、後件が主観的評価文である。この文では、条件形「ば」に前接する「行け」は正用であるが、「行けばよかった」と「行ければよかった」では文意が異なる。話し手自身の後悔という文脈が与えられている場合、「行けば」は自己判断・選択の後悔を意味するが、「行ければ」は自分の能力あるいは状況に対する後悔を意味する。筆者らが違和感を感じたのは、この文が後者の場面で作例されたにも関わらず、文脈にそぐわなかったためである。

他方、筆記の課題で提出された作例には、可能動詞が使われていても違和感が生じる以下のような文も見られた。

- 3) ? 漢字が書けるように、毎日勉強しています。
- 4) ? 日本に行けるように、日本語を勉強します。

これらは、目的を表す「ように」の文である。3)の文は、一見問題がないようにも思えるが、文脈を踏まえて考えると違和感が感じられる。というのも、書き手はこの文の中に既に漢字を書いている。それにもかかわらず「漢字を書けるように」と言うのは、現実の状況とのズレがあり、より状況に合う文があるように思われた。例えば、「きれいに書けるように」など副詞「きれいに」が加われば、「毎日勉強する」目的として適切に感じられる。ところが、4)の文は同様の方法で調整しても、違和感が解消されない。例えば、「いつか日本に行けるように、日本語を勉強しています。」と副詞「いつか」を加えた場合、日本語を勉強したからといっても、日本に行ける状況が必ずしも成立するわけではなく異を唱えることが可能ではないだろうか。

このように、可能動詞使用に関する違和感は、可能動詞が含まれる複文の文法と文意と文脈に跨っ

ており、その要因を突き止め、より学習しやすい形で授業に還元する必要があると考えられた。そこで今回は、可能動詞の意味を見直して学習者が産出しにくい可能動詞の要点を探り、違和感のない文を作るためのポイントの示し方を検討することにした。

3. 可能動詞の見直し

まず、日本語教育で主に用いられる文法書から、可能動詞に関する記述をまとめた。表 1 に示す。

表 1 可能動詞の意味に関する記述

日本語文型辞典改訂版(2023)	初級を教える人のための日本語文法ハンドブック(2000)	中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック(2001)	初級日本語文法と教え方のポイント(2005)	どんなときどう使う日本語表現文型辞典(2007)
1. 能力 2. 可能性 3. 性質	1. 動作主の動作の能力 2. 動作の対象の動作の可能性	1. 動作主の能力 2. 状況可能 3. 対象が受ける動作の可能性	1. 能力可能 2. 状況可能 (状況が許可されるか否かと、物の状態や性質で行為遂行可能かどうかの2種)	1. 可能 (技術的・身体的能力可能決まり、状況などで行為の実現が可能であること) 2. 全部完了 3. 性能評価

網掛けで示した通り、いずれの文法書も「能力可能」と「状況可能」の説明をあげていたが、5つ目の『どんなときどう使う日本語文型辞典』のみ「全部完了」をあげていた。これには、「レポートが書けたら、見せてください」という可能動詞の過去形を用いた例文が紹介されている。この「書けたら」は、2.2 で見た学習者が産出しにくい「おかげで」や「～ばいい」で用いられる可能動詞と同じ意味と予想される。そこで、2.2 であげた例を正用に直して示す。

- 1)' 友達がチケットを買ってくれたおかげで、きのうコンサートに行けました。
- 2)' 行ければよかったのに・・・。

1)' の文は、確かに「行く」という行為が最後まで終わった完了を意味している。2)' は、「行ければよかったけど行けなかった」という「終わった状態」になったことが示されている。したがって、両方とも完了の文と捉えられるが、「全部完了」について、文型辞典自体に詳しい説明は記されておらず、可能動詞の中心的意味から外れることがうかがえた。

そこで、先行研究をあたることにした。日本語の可能表現の多様な用法をまとめた渋谷(1993)では、可能表現の意味が「潜在系可能」と「実現系可能」の2つに分けられていた。潜在系可能は、ある動作の実現を含意せず、潜在的に可能／不可能である／あったことを示し、実現系可能は、ある動作を実現することが可能／不可能である／あった(=実現する／した、実現しない／しなかった)ことを表すとされている。つまり、可能表現の意味分類を能力や状況によって行うのではなく、ある行為が実現することを含意するか否かに分けて捉えている。この分類を元に、村上(2015)は初級教科書で扱われる実現系可能を調査した。この論文では、実現系可能を文型として取り上げている初級教科書が少ないことが報告されている。例えば、『みんなの日本語』では第27課に「ことしは雪が少ししか降りませんでしたから、スキーができませんでした。」という例文が見られるが、ここでの学習項

目は「しか」であり、実現系可能は文型として扱われていない。前述した「全部完了」は実現系可能に該当すると考えられるが、1)' 2)' のような複文ではどのように扱われているのだろうか。この疑問に対して、文法書並びにこれまで本校で使用したことのある中級以上の教科書の記述を確認したところ、表2のようにまとめられた。

表2 「おかげで」と「～ばいい」の記述

		おかげで		～ばいい	
		可能動詞についての言及	例文	可能動詞についての言及	例文
文 法 書	日本語文型辞典 改訂版 (2023)	×	×	×	×
	日本語類義表現と使い方のポイントー表現意図から考える (2018)	△ (「後文には意志表現や働きかけ表現は来ない」と記載)	○	×	×
	どんなときどう使う日本語表現文型辞典 (2007)	×	○	△ (「話す人の意志を含む表現は使わない」と記載)	○
	中級日本語文法と教え方のポイント (2007)	△ (「後文には意志表現は来ない」と記載)	○	×	×
	中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック (2001)	×	×	×	×
教 科 書	4技能でひろがる 中級日本語カルテット1 (2019)	△ (「話者が自分で制御できないことがら」と記載)	○	×	○
	上級へのとびら (2009)	×	×	×	○

表2からわかるように、可能動詞についての言及はいずれの文法書、教科書において一切なく、言及があるのは意志表現についてであった。意志表現は初級教科書でもたびたび言及され、2.1で述べたように、『みんなの日本語』でも可能動詞は非意志表現の一つとして扱われている。しかし、1)' 2)' の文を振り返ると、「意志表現が来ないので可能動詞を用いる」という説明では、学習者が注意を払って作例できるとは考えにくい。むしろ、実現系可能を取り上げ、行為の実現が可能／不可能であったかを示すために可能動詞を用いると説明した方が、学習者の実際の使用に役立つのではないだろうか。これを踏まえ、次節では非意志的表現としての可能動詞の扱いを掘り下げ、実現系可能との関連を探る。

4. 意志を表さない動詞としての可能動詞

『みんなの日本語』において、意志動詞が初めて言及されるのは第36課である。この課では「V1のようにV2」が学習項目となっている。筆者らが使用している『みんなの日本語 初級Ⅱ 第2版 翻訳・文法解説ドイツ語版』（スリーエーネットワーク 2015）では、「ように」は「V2の目的や目標が、「～のように」で表現される状態の達成であることを示している。「ように」の前には、意図（意志）を表さない動詞（例：可能動詞、わかります、みえます、きこえます、なりますなど）の辞書形または否

定形が用いられる。」と説明されている。ここで、可能動詞は突然に「意志を表さない動詞」として「見える」「聞こえる」などの自発動詞と一括りにされるが、他の文法書でもほぼ同様の扱いが見られる。以下に引用する。

「P ように Q」で、Q は意志的な動作ですが、P は意志的な動作ではなく、可能形・否定形や「なる」などの状態を表す動詞が来ます。」(松岡・庵他 2000 : 216)

「「～ように」の形で、「～」には話者の意志を表さない動詞(意志を含まない動詞や可能の意味を表す動詞など)が来る。」(友松他 2007 : 401)

「「ように」の前には、「なる」「できる」など人間の意志に関わらない無意志的な行為を表す動詞や可能を表す「V-れる」、あるいは動詞の否定形など、状態的な意味を表す表現が用いられることが多く、後の節には話し手の意志的な行為を表す動詞が続く。」(グループ・ジャマシイ 1998 : 621)

このように、いずれも『みんなの日本語』の説明と同じく「V1 ように V2」の V1 では、意志を表さない動詞として、あるいはそれに並ぶものとして可能動詞を使用すると述べられている。

ここでもう一つ注目したいのは、「意志」に加えて「状態」という用語がキーワードとして用いられていることである。日本語文法の基礎を記した益岡・田窪(1992)でも、可能動詞は状態動詞の一つと紹介されており、可能動詞は「非意志的かつ状態的な意味を持つ」と言える。可能動詞の語彙と文法的特徴を論じた山岡(2003)は、可能動詞はもともと動詞がもっていた動作性を潜在化させることで成立する動詞としている。また友松他(2007)では、可能動詞になる動詞は人の意志を持つてする動作の動詞だけとされている。これらをまとめると、動詞を可能形にすることは、動作性の潜在化であると同時に動詞に状態的な意味を持たせる操作であり、その動詞は元々の意志的動作を示しており、それが潜在化されるということは、意志も非意志化されると言い換えられるだろう。したがって可能動詞というのは、それぞれの動詞の動作性と意志性を意味の表面から内に潜ませ、状態性と非意志性を顕在化させた表現と捉えられる。以上を踏まえて「V1 ように V2」を振り返ると、V1 は一般に目的を意味するとされるが、同じく目的を示す「V1 ために V2」とよく似ているため、学習者の混乱を招くことが多い。また、「行為を行う意図・ねらい」とも言い換えられる「目的」という用語は、「意志」という言葉と関連づけやすい。そこで、V1 は「目指したい状態を示す」というように、状態性をより前面に出して説明するとどうだろうか。この方が動詞の状態性に注意を向けやすく、学習者の実際の使用に有益と思われる。

しかし、状態性を前面に出すと、状態を意味する最も代表的な文法である「～ている」形を想起する学習者が現れるかもしれない。それを避けるために、「非意志的表現として可能動詞を用いる」ことを示しても、3 で見たように作例時に注意を促す説明としては弱く感じられる。そこで注目すべきは、実現系可能の概念ではないだろうか。例えば、2.2 の 3) の例文を振り返ると、「漢字が書けるように、毎日勉強しています。」という文に違和感が感じられるのは、「漢字が書ける」が既に達成されている状態であり、文脈とのズレが原因であった。ここに、「V1 は「まだ実現していない目指したい状態」を示す」と、実現系可能の概念を加えて説明を行う。すると、非意志という掴みにくい概念を用いずに V1 の表すことが説明できる。もし、学習者から現実の状況とのズレが感じられる作例が出てきた場合は、現時点でそれが実現しているかどうかを確認し、すでに実現しているのであればそれを指摘して、まだ実現していない状態が何かを明らかにし、それを前件に書くという支援が可能になる。文脈に合った適切な文にするために、2.2 では、「きれいに漢字が書けるように」という副詞の加筆を提案したが、日本語では動詞の形式で非意志性を十分に表現することが不可能なため、非意志性を表すのに最

も使用頻度が高い方法は、副詞の使用とされている（ラトナーヤカ 2008）。すなわち、副詞を用いることは「まだ実現していない状態」を詳述するとともに、文意の非意志性を高めることもでき、「V1 ように V2」の文型を成立させるために非常に適した方法と言える。

さらに、2.2 の 4) を考えると、「いつか日本に行けるように、日本語を勉強します。」という文の V1 は、確かに「まだ実現していない目指したい状態」である。しかし、グローバル社会においては、いずれの国に行く際も現地の公用語を身につけていることは必須条件ではなく、この例文の違和感は V1 ではなく V2 の文脈のズレにある。つまり、「V1 ように V2」の V2 は、V1 を実現させる状態に必ず到達する動作を表し、「いつか日本に行ける」状態に達するのであれば、これが物理的に可能になる「貯金します」などの方が、文脈に適した表現と言えるだろう。このように、可能動詞を含む複文の説明を明快にする方法として、実現系可能という概念を積極的に用いることを提案したい。

5. まとめ

以上のように、本稿では学習者から産出される可能動詞を含む複文についての違和感を手がかりに、可能動詞の意味の見直しと違和感のない作例のための要点を検討してきた。

学習者の作例分析から、違和感は単なる形態的誤りではなく、文法と文脈の不一致、特に可能動詞が表す意味の説明が不十分であることに起因すると考えられた。従来の教科書や文法書では、可能動詞は「能力可能」「状況可能」や「非意志動詞」として説明されることが多いが、これだけでは学習者が実際の文産出で適切に使い分けるには不十分であることが推察された。

そこで、先行研究から可能表現を「潜在系可能」と「実現系可能」に分ける視点を取り入れ、教材を概観すると、行為が実際に実現した／しなかったという事実を含意する「実現系可能」が、教科書では文型として十分に扱われていないことが明らかになった。そして、これが学習者にとって可能動詞の産出のしにくさの一因になっていると考えられた。さらに、この概念を導入することで、「おかげで」や「～ば～のに」、「V1 ように V2」といった構文における可能動詞の使用条件を、より明確に説明できる可能性がうかがえた。中でも、「V1 ように V2」という文では、V1 が「意志を表さない動詞」とされる従来の説明に代えて、「まだ実現していない目指したい状態を表す」という観点から説明することが、学習者の理解と産出に有効であると提案したい。

ただし、概念的な説明のみでは学習者とその文の本質を理解することは困難である。学習者の理解と産出を助けるためには、体験的な学習が必要であり、それぞれの文型の根本的意味を表す例文に多く触れ、帰納的に理解することが重要である。そのための例文収集と整理、そしてドイツ語との対応についても調査を進めることを今後の課題としたい。

参考文献

- 市川保子（2005）『初級日本語文法と教え方のポイント』スリーエーネットワーク
市川保子（2007）『中級日本語文法の教え方とポイント』スリーエーネットワーク
市川保子（2018）『日本語類義表現と使い方のポイントー表現意図から考える』スリーエーネットワーク
岡まゆみ・筒井通雄・近藤純子・江森祥子・花井善朗・石川智（2009）『上級へのとびら』くろしお出版
小川誉子美・三枝令子（2004）『日本語文法演習ことがらの関係を表す表現ー複文ー』スリーエーネットワーク
グループ・ジャマシイ（編）（2023）『教師と学習者のための日本語文型辞典 改訂版』くろしお出版

- グループ・ジャマシイ（編）（1998）『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
- 坂本正監修・安井朱美・井出友里子・土居美有紀・浜田英紀（2019）『4技能でひろがる 中級日本語カルテット1』ジャパントイムズ出版
- 渋谷勝己（1993）「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』第33号（1）， i-262.
- 白川博之監修・庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- スリーエーネットワーク（2013）『みんなの日本語初級Ⅱ第2版 本冊』スリーエーネットワーク
- スリーエーネットワーク（2015）『みんなの日本語初級Ⅱ第2版 翻訳・文法解説ドイツ語版』スリーエーネットワーク
- 友松悦子・宮本淳・和栗雅子（2007）『どんなときどう使う日本語文型表現辞典』アルク
- 独立行政法人 国際交流基金 編著（2016）『まるごと 日本のことばと文化 中級1』三修社
- 益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法』くろしお出版
- 松岡弘監修・庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 村上佳恵（2015）「日本語の教科書の実現可能の取り扱いについてー初級の教科書の調査よりー」『学習院女子大学紀要』第17号, 147-162.
- 山岡政紀（2003）「可能動詞の語彙と文法的特徴」『日本語日本文学』第13号, 1-36.
- ラトナーヤカ・ディルククシ（2008）「非意志性の表し方ーシンハラ語と日本語を中心にー」『名古屋大学人文科学研究』第37号, 43-62. <<http://hdl.handle.net/2237/23247>>（2025年12月1日）